

第 68 回市町村対抗「かながわ駅伝」競走大会の展望

(資料提供：一般財団法人神奈川県陸上競技協会)

横浜が 5 連覇へ万全の布陣

横浜市には 5 人の大学生がエントリーされている。昨年も好走した澤野健史選手（専修大）をはじめ、上野大空選手（専修大）、我那覇和真選手（神奈川大）、松田憲彦選手（法政大）、中学生以来地元に戻ってきた土屋貴幸選手（東海大）らは、東京箱根間往復大学駅伝で活躍した選手であり、どの区間でもトップにたてる布陣である。

また、ベテランの富張裕紀選手（横浜市陸協）も各種ロードレースで安定した走りをみせているほか、中学生区間、女子区間でも全く他に隙を見せず、総合成績においても大会記録の更新が期待される。

小田原市は、昨年 2 位と大躍進を遂げ、大会を大いに盛り上げた。2 つの区間で区間最高記録を残した昨年ほどの勢いはないが、ベテランの瀬戸智弘選手（小田原 NR）、柏木正嗣選手（小田原市陸協）の踏ん張りに期待するほか、高校生の川口賢人選手（佐久長聖高）の走りにも注目したい。

茅ヶ崎市は、昨年同様帰省地参加の石原 洸選手（新電元工業）、川崎健太選手（スズキ浜松 AC）を軸に、大学生の安定した走りに注目したい。櫻井亮太選手（国士舘大）、高梨寛隆選手（法政大）が昨年同様の走りをみせ、滑り出しの中学生区間で上位集団につければ、昨年同様の 3 位を確保できるであろう。

平塚市は、鈴木悠介選手（日本体育大）、杉山連哉選手（帝京大）二人のエースが健在で、ロードに強い伊澤 聡選手（平塚市役所）、大学生の稲垣秀平選手（東海大）の走りに期待が持てる。特に鈴木選手は、東京箱根間往復大学駅伝の 6 区で快走（区間 2 位）し、昨年同様 7 区で区間新を更新して一気に上位に浮上することが予想される。同駅伝の 10 区で快走し、帝京大のシード権獲得の立役者となった杉山選手の活躍も注目される。

一昨年準優勝した横須賀市は、小泉雄揮選手（日本体育大）、森 夏樹選手（専修大）が引っ張る若いチーム力で、昨年 5 位の成績を上回るのではないかと期待されている。畔柳 揮選手（日本大）、高沢圭祐選手（順天堂大）の大学生に、好調の高校生、秋澤啓尚選手（藤沢翔陵高）が加わり、中学生・女子区間も安定した走りをみせれば、前半は横浜に先行することも可能なメンバー構成である。

川崎市は、今年活躍が期待できる布陣となっている。昨年同様 1 区の中学生区間では、全国大会でも大活躍した神林勇太選手（宮前平中）がトップで襷を運んでくるだろう。エースの濱野優太選手（専修大）をはじめ、クレストの吉田 潤選手、藤松利之選手も好調で、昨年 1 区区間賞の橋本龍一選手（法政二高）も順調に力を伸ばしている他、佐藤貴大選手（ユニクロ）をはじめ、若い加藤 平選手（専修大）、櫛田晃輔選手（中央大）らが、良い流れの中で力を発揮できれば中盤までトップ争いに絡めそうである。

藤沢市は、4 人のプレス工業の実業団選手の出来いにかかっている。橘 明德選手、三宅雅大選手は全日本実業団対抗駅伝でも堅実な走りをみせた。今村 慧選手、皆倉一馬選手の二人はベテランであり、そつなく走ってくれるであろう。4 人が実力通りの走りを披露すれば、若い藤江千紘選手（湘南工科大附高）や四方祥雄選手（東京情報大）らもしっかりと走れるだろう。

町村の部について

各町のベテラン勢は「かながわ駅伝」を年間の最大目標にすえて練習に励み、仲間を大切にランニング・ジョギングを楽しみながら、休日等の走りこみや追い込み練習を通し、チームの絆を強くして大会に備えている。

昨年優勝の愛川町は、主将の山口優弥選手（愛川町役場）の踏ん張りを、4人の伸び盛りの高校生がいかにかかりと繋ぐかに二連覇がかかってくるだろう。県高校駅伝で好走した岩寄 誠選手、荻田広野選手（光明相模原高）に期待したい。中学生区間の吉川敦史選手（愛川中原中）も上位グループで争うことが予想されるため、2・3区でいかに流れを作ることができるかが鍵であろう。

葉山町は「今年こそ」を合言葉に、全日本実業団対抗駅伝に出場した川村駿吾選手（プレス工業）が帰省地参加選手として走る。この走りは昨年のチーム力と比較すると5分近い時間短縮に相当するインパクトとなるだろう。また、内田洋平選手（日本大）、藤本星夜選手（東京情報大）の二人の大学生も昨年以上に力を増し、中学・女子区間でも、しっかりと力のある2人が控えており、愛川町を凌ぐ力量もあるのではないかと。

大磯町も侮れない。中学生区間を走る松村翔太郎選手（大磯中）は、先の全国都道府県対抗駅伝でも好走したとおり、3000mの県中学記録保持者で、トップ争いをしてくるだろう。2区を受け持つ大川一成選手（藤沢翔陵高）は、県高校ナンバーワンの実力者で一般・大学生にも引けをとらない力を持っており、良い流れを作り出すであろう。大学生の小島義之選手（國學院大）も6区で区間上位で走る実力を備えており、村本洋介選手、平原渉太選手の二人の平塚市役所勢が、どれほど安定した力を発揮できるかにかかってくるだろう。

二宮町も上位にくい込む実力を持っている。エースの田中健介選手（松蔭大）を中心に、実力の伸びが著しい小坂太我選手（藤沢翔陵高）、堅実に走れる中崎正大選手（慶應義塾大）、磯部祥一郎選手（秦野高）と女子の近藤さな恵選手（平塚農高）も好調である。

箱根町は「かながわ駅伝町村の部で優勝しよう」を合言葉に強化に取り組み3年目を迎え、一つの集大成の年としている。一昨年まで平塚市の黒柱で走っていた石井清加寿選手（平塚市役所）を帰省地参加で起用。県高校駅伝4区区間新で走った大泉 奨選手（藤沢翔陵高）が2本柱だが、大泉選手のケガの回復状況いかんで大きな違いになってくる。また、田代 進選手（足柄下郡陸協）、岡田慶一朗選手（日大三島高）、越阪部隆成選手（相洋高）ら若い選手も安定して走っており、昨年以上のタイム短縮が可能である。

一昨年まで三年連続で優勝を飾った大井町も、足柄上郡陸協所属の岩本瑛吾選手、海老名俊彦選手、平野泰輔選手のベテラン勢が今年は安定した成績を残しており、他町が崩れるようであればスピードのある小川智也選手（相洋高）、女子区間では、3000m S C 全国高校記録保持者で、京都の全国高校駅伝でも快走した丹羽七海選手（白鵬女子高）らの活躍により、上位に入ってくるであろう。

その他、寒川町の北 重治選手（ハートブレイク）は、出場すればこの大会2人目の30回出場を果たすことになり、その精進振りも話題となるだろう。

各区間の見所について

第1区（3.0km・男子区間[中学生]）

川崎市の神林勇太選手（宮前平中）と大磯町の松村翔太郎選手（大磯中）の激しい先頭争いが見物。二人とも一月の都道府県対抗駅伝では、今までの県記録を更新し勢いづいており、8分40秒前後の区

間新記録が出るのではないかと。他の選手も二人のスピードに臆することなく積極的な走りをみせてほしい。

第2区 (9.7km・男子区間[高校生以上])

各チームはエース級を投入し、勝負に出てくる。横浜市は澤野健史選手（専修大）、川崎市は濱野優太選手（専修大）、大磯町は大川一成選手（藤沢翔陵高）の3人が後半まで併走し、激しい先頭争いを繰り広げることが予想される。中でも大川選手がどこまで大学生に食らい付けるのかが見所である。また、昨年区間賞の横須賀市の小泉雄揮選手（日本体育大）や大和市の五十嵐祐太選手（JR東日本）、相模原市の高谷将弘選手（JR東日本）、葉山町の川村駿吾選手（プレス工業）の追い上げ（ごぼう抜き等）も注目される。

第3区 (8.2km・男子区間[高校生以上])

ほぼ平坦の走りやすいコースで、2・3区と連続して上位争いに絡む作戦にでてくる区間である。横浜市はこの3区辺りで先頭に立つ作戦にでるのではないかと。土屋貴幸選手（東海大）を投入し、持ち前のスピードで24分台の区間記録に迫るだろう。川崎市の橋本龍一選手（法政二高）、藤沢市の三宅雅大選手（プレス工業）、昨年区間賞の権守竜也選手（小田原市役所）らの追い上げにも注目したい。見通しが利くコースのため、スピードのある選手にとっては前の走者が見えることにより、思った以上の力を発揮する機会が多く、若い高校生にとっては登竜門となる区間となっている。

第4区 (2.7km・女子区間)

距離こそ2.7kmと短い、記録的には思いのほか差がつく場合がある。ここでは相模原市の赤坂よもぎ選手（元石川高）が絶好調で、区間賞争いの筆頭ではないかと。その他、大井町の丹羽七海選手（白鵬女子高）、大和市の佐藤成葉選手（荏田高）、小田原市の鈴木ひとみ選手（玉川大）にもチャンスはあるだろう。秒差の競い合いの中で区間記録に迫る気迫の走りを期待したい。

第5区 (7.2km・男子区間[高校生以上])

スタートからゴールまで、緩やかな登り坂が続き、一般区間の中では最も早くスピードを活かすことができる区間である。先頭は横浜市が譲らないだろう。上野大空選手（専修大）が起用され、他の市町に高校生選手が多い中、さらに差を広げるのではないかと。昨年、この区間の区間賞は高校生だった横須賀市の畔柳 揮選手（日本大）が獲得しており、距離が短い分スピード豊かな高校生の快走が見られる区間である。

第6区 (10.7km・男子区間[高校生以上])

大きなアップダウンが2ヶ所あるだけでなく、登り坂が最後まで1.5kmも続く、本駅伝最大の難コースである。特に中間点先からの真名倉坂は選手を悩ませるであろう。この区間のでき具合で順位が大きく変わってくる。横浜市は最も力のある我那覇和真選手（神奈川大）を投入し、首位を不動のものにするのではないかと。他のチームもエースを投入し、帰省地参加として起用される多くの選手もこの区間を任されるものと思われ、区間賞争いも熾烈なものとなるだろう。

第7区 (10.0km・男子区間[高校生以上])

スタート直後の1kmは上りだが、全体的には下り坂が多く、昨年区間記録を更新した平塚市の鈴木悠介選手（日本体育大）が本年も爆走するだろう。東京箱根間往復大学駅伝では6区の区間2位ながら、箱根湯本駅前までの下り区間では区間記録更新ペースで走っており、昨年同様、他チームに1分近い差をつけるのではないかと。

横浜市も昨年同様に松田憲彦選手（法政大）を配し、去年逃した区間賞獲得を狙ってくるだろう。最後まで気を緩めることなく、総合成績の大会新記録を狙ってほしい。